

七月の詩

堇色

中谷 恭子

薬局の猫は子供を生んで

攻撃的になつている

近寄るな お前に何がわかる

父は

五〇〇のバイクに荷物を積んで

パラパラと高い音をたてて走って行く

日暮れの街の

打ち水

湿った土のにおい

格子の向こうに薄い光が洩れている

道子さんは

列車に飛び込んだと狭い街で

噂になつている

もう死んだ気がするの

笑う道子さんの

堇色の小紋

赤橙黄緑青藍堇

虹がかかっている

あっちからこっち

七月

汐入りの河口から

呼ばれたからねと

道子さん